

宮沢賢治詩『序』の現代語解釈

—— 大乘仏教の求道者としての生き方を重視した解釈 ——

大久保 等

要約 宮沢賢治の詩の解説や一つの詩の中の部分的解釈は、多数の専門家によって試みられている。しかし、一つの詩の全体を通じた現代語解釈は今まで見つけることができなかった。筆者は、前回（八戸学院短期大学研究紀要第四〇巻（二〇一五年））に、「宮沢賢治詩の現代語解釈 その一」として、宮沢賢治の詩の代表作の一つ『序』という詩について、幾つかの解説書を参考にして、また一部に筆者による具体的な説明を付け加えて、「無宗教的な立場から」詩全体の現代語解釈を試みた。

今回改めて、大乘仏教（『法華経』）の求道者としての生き方を重視した、詩全体の現代語解釈を試みた。前回の「無宗教的な立場からの現代語解釈」が今回の解釈でも通用する部分は、そのまま採用した。『序』を要約すると、宮沢賢治は「生きている私という生命現象は、大きな生命の流れが輪廻を繰り返すこの世界の法則として、過去から仮定されていた現象である。その現世に、私は『心象スケッチ』という手法で書き記した詩を残して行く。その私を書き残したものは、厳密には、私が主張したい通りの正しい内容で他の人に伝わることはない。私と他の人には、『共通認識しか共有できない』という問題が存在する。いつかこの『共通認識しか共有できない』という問題は四次元研究の中で説明されるだろう。（その説明が成って、私の主張したい事が、初めて正しく他の人々に伝わるだろう）」と云っている。

一 はじめに

筆者は、八戸学院短期大学研究紀要第四〇卷(二〇一五年)に、「宮沢賢治詩の現代語解釈 その一」として、「心象スケッチ『春と修羅』第一集」の巻頭にある『序』と云う詩について、現代語解釈を試みた。

しかしそれは、宮沢賢治の大乗仏教的、利他的な生き方を無視した、「無宗教的な立場からの現代語解釈」であった。

このことについて、「彼の文学は、いかなる点で大乗仏教的、法華経的であるか。(中略)こういう問いが問われることなしに、賢治の文学のもっている意味はまったく理解されないのだ。」という主張がある(梅原猛著「地獄の思想」一九六頁)。その主張について、筆者も同意するものである。但し、盛岡高等農林学校で大正時代としては高いレベルの自然科学を学んだ宮沢賢治の側面もあり、大乗仏教の求道者としての解釈と同じレベルで自然科学的解釈も含めるべきであると考ええる。

今回は、梅原猛著「地獄の思想」(中公新書)と斎藤文一著「宮沢賢治の世界―銀河系を意識して」(国文社)を主な参考資料として、また大乗仏教や法華経に関する部分は、佐々木閑著『集中講義 大乗仏教 こうしてブッダの教えは変容した』(NHK出版)を主な参考資料として、大乗仏教の求道者としての立場をより強調した現代語解釈を試みた。

前回、「八戸学院短期大学研究紀要第四〇卷」(二〇一五年)で行った「無宗教的な立場からの現代語解釈」が、今回の解釈

でも通用する部分はそのまま採用した。

筆者の現代語解釈について、他の研究者が異なる解釈を提示されることは、大変望ましいことである。そのことによって、宮沢賢治詩の正しい解釈が広く一般に普及していくことを望んでいる。

二 心象スケッチ「春と修羅」第一集、『序』の現代語解釈

まず、詩の全文を掲載する。

(一) 『序』の全文

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
(あらゆる透明な幽霊の複合体)
風景やみんなといっしょに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です
(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の
過去とかんずる方角から
紙と鉱質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでちつづけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅や海胆は

宇宙塵を食べ または空気や塩水を呼吸しながら

それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

それらも畢竟こころのひとつの風物です

ただたしかに記録されたこれらのけしきは

記録されたそのとほりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで

ある程度まではみんなに共通いたします

(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに

みんなのおのおののなかのすべてですから)

けれどもこれら新世代沖積世の

巨大に明るい時間の集積のなかで

正しくうつされた筈のこれらのことばが

わづかその一点にも均しい明暗のうちに

(あるひは修羅の十億年)

すではやくもその組立や質を變じ
しかもわたくしも印刷者も

それを變らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてただ共通に感ずるだけであるやうに

記録や歴史 あるひは地史といふものも

そのいろいろの論料といつしよに

(因果の時空的制約のもとに)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

おそらくこれから二千年もたつたころは

それ相当のちがつた地質学が流用され

相当した証拠もまた次々と過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいつぱいの無色な孔雀が居たとおもひ

新進の大学士たちは氣圈のいちばんの上層

きらびやかな氷室素のあたりから

すてきな化石を發掘したり

あるひは白亜紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡を

發見するかもしれません

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として

第四次延長のなかで主張されます

大正十三年一月廿日はつか 宮 沢 賢 治

(二) 仏教的解釈を行う上での事前知識

(ア) 現代語解釈の参考文献について

次項以下に、段落ごとに分けて現代語解釈を試みる。この段落分けは、新潮文庫「宮沢賢治詩集 草野心平編」(昭和四十四年四月十日発行)二二一頁以降の「解説」を参考にして

いる。
また、『序』という詩全体の全般的な解釈は、同書の二二二頁～二一九頁を参考にして

いる。
詩の解釈では、さらに、梅原猛著「地獄の思想」(中公新書、一九六七年)の一九二頁～二二〇頁を参考にして

いる。
梅原氏の理解は、宮沢賢治の大乗仏教の求道者としての生き方から解釈を行ったものであり、一つの優れた解釈だと思われる。

(但し、梅原氏はこの著書の中で、大乗仏教の二面性を主張し、「釈迦の思想は、あまりにも否定に傾きすぎるように思われる。」「大乗仏教の思想が仏教のなかにあらわれたのは、こうした人生否定の哲学から、ふたたび人生肯定の哲学にかえろうとしたからであろう。かくて大乗仏教は法華経、華嚴経、大日経などを生み出し、永遠の生命の思想に達したのである」(一一頁)として、大乗仏教の日本での伝播には、(生の賛歌を謳った)「生命の思想」が含まれていると主張しているが、筆者は、他の仏教解説書でそのような記述を見たことがないので、いささか同

意しかねるものである。むしろ、その理解は、梅原氏独自の理解と捉えるべきではないかと考える。それでも、梅原氏による、大乗仏教の求道者としての生き方から考察した、宮沢賢治の『序』の解釈は納得できるものであり、一つの優れた解釈だと考える)

大乗仏教の考え方、そのものに関しては、佐々木閑著「別冊NHK 一〇〇分de名著 集中講義 大乗仏教 こうしてブツダの教えは変容した」(NHK出版、二〇一七年(以下、「集中講義 大乗仏教」と略記する))を主な参考資料に使っている。

(イ) 大乗仏教の考え方

まず、大乗仏教の考え方から述べる。

ここでの大乗仏教の考え方は、前掲の「集中講義 大乗仏教」を主な参考にして

いる。
釈迦は「生きることは苦しみである」と捉えた。人生は「老」「病」「死」の苦しみに悶え続けるものである。仏教では、この世界は、「天(神々)」「人(人間)」「阿修羅(憎しみを持つ悪い神々)」「畜生(動物のこと)」「餓鬼(飢餓などで苦しむ生き物)」「地獄(ひたすら苦しむ生き物)」の六つの世界(六道)から成り立っていると考える(「阿修羅」は最初は無かったが、後に追加された)。そして、あらゆる生き物は、死んだ後、六道のどれかに生まれ変わり、延々と生まれ変わりを繰り返すと考える。このことを「輪廻(または輪廻転生)」と云う。釈迦は、「生きることは苦しみである」から、輪廻は苦しみが続くことを意味する(「天」は苦しみの無い世界であり、良いよ

うに思えるが、「天」も六道の一つであるから、神々としての寿命が終われば、違う世界に生まれ変わることになる（五十三頁）。

よって、出家して仏教の修行者集団に加わり、苦しみの源である「煩惱」を、瞑想を中心とした修行の積み重ねで消し去ることで（悟りを開くことで）、「涅槃」に到達することが真の安らぎであると考えた。涅槃は、仏道修行によって、心の中の煩惱をすべて断ち切って、二度と生まれ変わらない世界に入ることを云う。

以上が釈迦の時代の仏教であるが（これは「小乗仏教（上座部仏教）」の流れに繋がるものである）、その特徴は、自己鍛錬で救いを得ようとするものだった。釈迦入滅後「部派仏教」の時代を経て、「大乘仏教」が興った。「小乗仏教」と「大乘仏教」の違いは、前者が、修行僧が修行による悟りを得て仏陀（「悟りを得た人」）になるのに対して、後者は、日常生活の中で善行を積み重ねていけば、やがて仏陀になることができる、という教えである。つまり、修行僧のみが仏陀になる「小乗」に対して、在家信者でも仏陀になることができる「大乘」を説いている（「大乘」では、誰でも仏陀になる前段階の菩薩の状態にあると考える）。

「法華経」の経典と大乘仏教の他の経典との主な違いは、「法華経」が「すべての人々は平等に仏陀になることができる（衆生成仏）」という「一仏乗」を主張したことにある（例えば、「般若経」では、三種類ある修行のどれかの修行を積む事によって仏陀になる「三乗思想」を説いている。また「浄土教」は、

人は死後に阿弥陀仏がいる極楽浄土へ往生することを説いている。ちなみに、日本における大乘仏教の宗派は、大乘仏教の中のどの経典を中心経典として扱うか、その経典のどの部分を重視するかが異なる）。

「法華経」には、「法華経」を憶え、読経し、人に説き、写し書きする者は、（中略）多くの美点を得る」と書いてあり、「法華経」の神秘性を信じて、自分が菩薩であることを自覚しなさい、という悟りへの思いが込められている」ため、「法華経」の信者の多くは、「法華経」を広めることが菩薩である自分の仕事と考え、「法華経」が説く世界をこの世に実現することが、彼らの最大の目的」になっている（九六頁〜九七頁）。

筆者は、この「法華経」の教えが、梅原氏が「地獄の思想」の中で、「彼の詩や童話は、彼みずからいうように、このような大乘仏教の真理を説くために書かれた」（一九五頁）と指摘しているように、宮沢賢治の「大乘仏教の求道者の生き方」に繋がったのだと思う。

（三） 段落ごとの現代語解釈

（ア） 「私」について

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
（あらゆる透明な幽霊の複合体）
風景やみんなといっしょに

せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

(ひかりはたまち その電燈は失はれ)

生きている「私^{わたくし}」という現象は、仏教で云う「輪廻」する大きな生命の流れが、何かのきっかけで現世に誕生した一つの現象である。それは、「私」の生命としての現象が、(この世界の輪廻の法則として)過去から仮定されており、スイッチを押して点灯した、現世に誕生した生命現象として青く光る電燈のようなものである(宮沢賢治は、人工物である交流電燈がスイッチを押せば点灯する事が事前に仮定されていたように、私と云う現象は、現世に生命を与えたこの世界を輪廻する大きな生命の流れの法則の中で、前々から仮定されていた、と云っている。それを「有機交流電燈」と表現したと解釈できる)。現在私が生きている生命現象というものは、映画で云えば、スクリーンに投射された映像の中では、その動きによって生命現象が認識される訳だが、幽霊というものもまた視覚に映ずる動きであるならば、動きという観点からすれば、私自身もまた幽霊の複合体現象と云える。風景やみんなと一緒にせわしく活動しながら、いかにも確かに生命活動を行う、(過去から未来まで、すべてのものには因果関係が働く、その過程の中で点灯した)一つの青く光る電燈のようなものである。電燈のスイッチが切られるように、いつか私に現世における死が訪れても、私の活動の結

果としての作品群、電燈で言えば「ひかり」に当たるものは残って行くことになる。

(イ) 「心象スケッチ」について

これらは二十二箇月の

過去とかんずる方角から

紙と鉱質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでたまちつづけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです

これらは、二十二ヶ月前から、紙に硬質インクで書き連ねたすべて私の心の中に想起したもの、ここまで保ち続けられた心の中に投影された影と光りの一こまづつ、そのとおりの心象スケッチである(それは、瞬間瞬間、私がこの世界で感受したものであるが、大きな生命の流れの一つの現象が私であることを考えれば、生命の流れの私以外の現象である、世界中のみんなも同時に感受するものである)。

(ウ) 「私の記録」と「他の人」の認識について

これらについて人や銀河や修羅や海胆^{うたい}は

宇宙塵^{じゆん}を食べ または空気や塩水を呼吸しながら

それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

それらも畢竟ひつぎようこころのひとつの風物です

ただたしかに記録されたこれらのけしきは

記録されたそのとほりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで

ある程度までみんなに共通いたします

(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに

みんなのおおのなかのすべてですから)

これらの詩について、他の人や、銀河や修羅や海胆は、もしそれらが私達の理解し得ない形で生命活動を行っているとするならば(私たちは、時々「地球は生きている」という表現を使う。これは「生き物でない」地球を生き物に喩えた「擬人法」の文学的表現にあたる訳だが、しかし、私たちが学校で学んだ生物学の定義を離れて、この地上に生活する中で、何かの機会に「地球は生きている」と感じる時がある。「地球」は、私たちが学んだ生物学の定義とは異なる形で、たぶん「生きている」のである。そのように、銀河や修羅も私たちの理解し得ない形で生命活動を行っているとするならば)、それぞれの生命維持のための宇宙の塵を食物として食べ、または呼吸しながら、自分中心の生命論を考えるだろうが、それらも畢竟それらがそう思っているだけの心の一つの風景に過ぎない(例えば、私達北半球に住む人間は、地球の北半球が南半球に比べて宇宙軸の上側にあると考え勝ちであるが、実は宇宙には上も下もない訳だから、あの地球儀の上下の作り方は間違っているのである。それにも関わらず、私達北半球に住む人間はそう思い勝ちである。

それと同じで人間中心の生命論も、私達がそう思っているだけのことなのである)。

ただ記録されたこれらの詩は、記録されたその通りのかたちでみんなに共通する。それは、私が周囲の景色を(本当はそうでないかもしれないのに、私なりに理解するより他には方法が無い訳だから)私なりに理解しているのと同じように、みんなも、みんなのそれぞれの認識の中で理解しているだけであり、すべての事柄についてそういう具合だから、ある程度までは共通認識を持てるが、完全一致の認識を持つことはできない。(例えば「犬」という言葉を聞けば、私自身は自宅で飼っていた雑種の白い小型犬のことを連想するのだが、他の人は秋田犬やスピッツなどの違う種類の犬を想起するかもしれない。そのように「犬」という言葉で、四つ足の、あのいぬ科のけだものを想起するというふうには、ある程度までは共通認識を持つ訳だが、完全一致の認識は持てないことになる)

(エ) 「時間」の性質と「私」の認識について

けれどもこれら新世代沖積世の

巨大に明るい時間の集積のなかで

正しくうつされた筈はずのこれらのことばが

わづかその一点にも均ひとしい明暗のうちに

(あるひは修羅の十億年)

すではやくもその組立や質を变じ

しかもわたくしも印刷者も

それを变らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

しかし新世代沖積世という現代の、世界全体に太陽光線が明るく降り注ぎ、時間が蓄積されていく中で、正しく記録されたはずのこれらの言葉が、僅か一瞬にも等しい時間経過のうち（それは修羅にとっては十億年に当たる時間経過なのかもしれないが）、太陽光線による腐食や空気による酸化を受けて、その組立や質を変じ（それらは何十年もすれば、記録された文字が読めない程度にまで浸食が進むというのに）、それにも関わらず、私や印刷者が変わらないと思ってしまう傾向は、確かにあり得る。

(オ) (皆が「真実」と認める)「科学」の認識について

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてただ共通に感ずるだけであるやうに

記録や歴史 あるひは地史といふものも

そのいろいろの論料データといっしよに

(因果の時空的制約のもとに)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

しかしそれだけではない。我々が感覚として感ずるものや、風景や人物を感じるように(食事する時、私たちは、事実として確かに歯で食物を噛み切っている。しかし歯医者で歯茎に麻醉を打たれた後、麻醉が切れる前に飲食すると、事実として歯

で噛み切っていない、本当に歯で噛み切っているかどうか、自分でも覚束ないことがある。つまり、私たちは感覚器官があるから、実際にあると思っているが、感覚器官が麻痺してしまえば無いと同じ事になってしまう訳である。そのように、風景や人物も感覚として感じていただけなのである)、そしてただ共通に感じていただけであるように(上述した「犬」という言葉で、みんながいぬ科のけだものをただ共通に感じていただけであるように)、(皆が「真実」だと認める)記録や歴史、あるいは地史というものも、その色々なデータと一緒に、原因と結果が繰り返される時間と空間の制約の中で、我々が感じているだけに過ぎない。

(カ) 「科学の発展」と「四次元研究」について

おそらくこれから二千年もたったころは

それ相当のちがった地質学が流用され

相当した証拠もまた次々と過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいつぱいの無色な孔雀が居たとおもひ

新進しんしんの大学士たちは気圏のいちばんの上層

きらびやかな氷窒素のあたりから

すてきな化石を発掘したり

あるひは白亜紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡あしあとを

発見するかもしれませぬ

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として

第四次延長のなかで主張されます

おそらくこれから二千年も経った頃には、それ相当の地質学が流用され、その証拠も次々と地層から発見され（例えば現在、土壌に含まれる花粉分析の技術によって、今から二千年〜五千年前の縄文、弥生人の食生活を突き止めようとする努力がなされているが、それと同じように）、みんなは現代に青空一杯の孔雀が居たと思ひ、気圏の一番の上層の水素素のあたりから（現代の人間活動によって蓄えられた、二酸化炭素やハロンガス等の）素敵な化石を発掘したり、白亜紀砂岩の層面に（現代の科学技術では検出不可能な）恐竜と共に生きていた人類の巨大な足跡の痕跡（その痕跡は、土壌分析によって発見される、人間の皮膚の発汗作用の特異性に基づく、土壌中の痕跡検査によって、その足の部分の大きさが特定されるかもしれない、そういう痕跡）を発見するかもしれない。

（ここに例示されたものは、宮沢賢治が読者に提示した虚構であろう。それは直前の文章、「われわれの感官や風景や人物をかんずるやうに」、「記録や歴史 あるひは地史といふものも」「われわれがかんじているのに過ぎません」と云う主張を強調する為の例えであると考えられる）

すべてこれらの命題（「何が真実なのか」「何故そうなるのか」という命題）は、「犬」という言葉でみんなが想起するものと同じものなのに、しかしただ共通に感じているだけで、実はみ

んな個別のものを想起しており、共通に感じているだけだという心象の性質や、一瞬の時間経過で廻り全てがどんどん移り変わって行くのに、今暫くは変わらないだろうと捉えてしまう傾向や（しかもそれで、今暫くは確かにさほど問題にもならない程度の違いなのに、時間経過とともに徐々に無視できないまでに蓄積してしまう変化である、そういう時間の持つ性質や）、さらには、皆が「真実」だと認める歴史や地史と云うものも、実は私たちが感じているだけに過ぎない、と云う認識の持つ性質は、心象や時間それ自身が内包している問題であり、時間や空間それに心象も含めた、この世界を全体として扱う四次元の問題として、今後の四次元研究の成果として解明され主張されて行く、そういう問題である。

（その解明が成って、私の主張したい事が、初めて正しく他の人々に伝わるだろう）

（キ） 全体的な要約

全体を通して乱暴に要約すれば、「生きている私という生命現象は、大きな生命の流れが輪廻を繰り返すこの世界の法則として、過去から仮定されていた現象である。その現世に、私は『心象スケッチ』という手法で書き記した詩を残して行く。その私が書き残したものは、厳密には、私が主張したい通りの正しい内容で他の人に伝わることはない。私と他の人の間には、『共通認識しか共有できない』という問題が存在する。いつかこの『共通認識しか共有できない』という問題は、四次元研究の中で解明されるだろう。（その解明が成って、私の主張した

い事が、初めて正しく他の人々に伝わるだろう」と云っている。

三 用語や文節の詳細解説

前節で述べた現代語解釈において、解釈が難しかった用語や文節の詳細解説を試みる。前節の現代語解釈においては、多分に疑問が残りながら、結果として前節のような一つの解釈を行ったものである。以下の解説は、他の宮沢賢治研究者の解説や解釈を参考にしているが、筆者なりの理解も含めている。

(ア) あらゆる透明な幽霊の複合体

生きている「私」という生命現象を、「あらゆる透明な幽霊の複合体」現象であるという理解に至ることは筆者には難しい。このことについて、宮沢賢治が、この後の段落にあるように、生命現象を感覚器官が感じているだけだと捉えていたとすると、この解釈は「私の感覚器官を刺激する様々な刺激の幽霊現象の複合体として(刺激の中には有用な刺激もあるし、私にとって無用な刺激もあり、それら全体としては幽霊現象の複合体と捉えることは可能であろう)、生きている現象が理解される」という解釈になる。

前節の現代語解釈では、「映画で云えば、スクリーンに投射された映像の中では、その動きによって生命現象が認識される訳だが、幽霊というものもまた視覚に映する動きであるならば、

動きという観点からすれば、私自身もまた幽霊の複合体現象と云える」とした。

(イ) (ひかりはたまち その電燈は失はれ)

「その電燈は失われ」は、電燈のスイッチが切られるように、私の現世における死が訪れた状態を意味すると解釈して良いと考える。「ひかりはたまち」について、二つの解釈が成り立つように思う。一つは、前節の「(三) 段落ごとの現代語解釈」で本文に採用した、「いつか私に現世における死が訪れても、私の活動の結果としての作品群、電灯で言えば「ひかり」に当たるものは残って行くことになる」という解釈である。もう一つは、「いつか私に現世における死が訪れても、私を現世に誕生させた原因である、六道の世界を輪廻する大きな生命の流れは保ち続けられる(それを、ここで「ひかり」と呼んだのかも(しれない))」という解釈である。

前節の現代語解釈では、次の文節で「これらは二十二箇月の過去とかんずる方角から／＼／＼／＼ここまでたまちづけられた／＼かげとひかりのひとくさりづつ／＼そのとほりの心象スケッチです」と、宮沢賢治自身の作品群を挙げていることから、前者の解釈を採用した。

(ウ) そのとほりの心象スケッチです

「心象」とは、沢山の研究者が指摘しているとおり、宮沢賢治という個人の心に、外界との様々な接触の中で想起された、その時どきの印象や、心に投影された映像イメージを指すと思

われる。それは「青ぞらいつぱいの無色な孔雀」だったり、「透明な人類の巨大な足跡」だったりするわけである。「心象スケッチ」とは、その「心象」をそのまま描写したものを指すことになるが、彼は心に投影されたその時どきの「心象」の言葉を、より彼の思う真実の表現に近づけるために何度も推敲をしているため、現実としてそのままの描写ではなく、より宮沢賢治の思う真実に近い描写である。

(エ) これらについて人や銀河や修羅や海胆は／宇宙塵を食べ、または空気や塩水を呼吸しながら／それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

「銀河や修羅や海胆が、宇宙塵を食べ、または空気や塩水を呼吸して、それぞれ新鮮な本体論を考える」というのは、現代の生物学からすれば、異様に思える。しかし、「生き物」について、生物学で定義された「生き物」だけでなく、もっと広く「自律的に動いているもの」を「生き物」と考えれば、「銀河」や「修羅」や「海胆」も「生き物」の一つに含めて良いと考えられる。私たちは文学における「擬人法」の情緒的表現を使って「地球は生きている」と表現するが、「自律的に動いている」ことに注目すれば、生物学の定義とは異なるもっと広い意味で、本当に「生きている」と考えられないだろうか。そしてそれらは、私たち人間が人間中心の世界観を持っているように、それぞれがこの世界の中心的存在としての世界観を持っていると考えられる。

前節の現代語解釈では、「銀河や修羅や海胆は、もしそれら

が私達の理解し得ない形で生命活動を行っているとするならば、それぞれの生命維持のための宇宙の塵を食物として食べ、または呼吸しながら、自分中心の生命論を考えるだろう」とした。

ところで、齊藤文一著「宮沢賢治の世界 銀河系を意識して」(国文社)で、齊藤氏は、宮沢賢治の銀河意識(宇宙観)は、「宇宙は一個の生命体である」、「これは賢治の詩的直感である」(二一七頁～二一八頁)とし、それは「今日、ガイア説として知られるもの」を「宇宙に拡大したものである」と主張している。そして「ガイア説」について、「この地球は、大気、海洋、地表、及びあらゆる生命体を含む単一の生きもの(ガイア)と見なすことが出来る」(二一六頁)と説明している。

ジェームズ・ラブロック博士の提唱した「ガイア説」(「ガイア理論」とも云う)は、現代の生物学で云う生命の定義に完全には合致しないけれども、「全体として地球が、生命や人間活動を含めて自己調節機能を持った、一個の安定したシステムである」(二一六頁)と云うものである。これは、代表的な生命の定義である「自己複製」「エネルギー代謝」「死」などには合致しないが、生命活動の重要な機能である「動的平衡状態を維持する」機能があるから、半ば「生命活動」と呼んでも良いように、筆者は考える。「地球」は、現代の生物学で扱う生物とは異なるけれども、動的平衡状態を維持する一種の「生命」と呼んで良いのではないだろうか。宮沢賢治は、それを銀河や修羅にまで広めて考えていたのではないかと考える。

(オ) (すべてがわたくしの中のみんなであるやうに／みんなのおののなかのすべてですから)

この表現は、「インドラの網」を連想させる。「インドラの網」とは、「華嚴經」の中で、帝釈天の宮殿に張られた美しい網飾りで、網の結び目の一つ一つが宝石の玉でできており、宝石の表面が他の宝石を映し出し、他の宝石も別の宝石を映すため、映り込みが無限に繰り返されることを云う。(この「インドラの網」の理解は、「集中講義 大乘仏教」一四〇頁～一四二頁を参考にしている)。宮沢賢治は、別に「インドラの網」という童話も書いている。

前節の現代語解釈では、この表現の直前で「これらについて人や銀河や修羅や海胆は／：／それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが／それらも畢竟こころのひとつの風物です／ただたしかに記録されたこれらのけしきは／：／ある程度まではみんなに共通いたします」という文脈から、ここでは「インドラの網」の世界観を連想させるものの、それを現代語訳の中には採用せず、「私が周囲の景色を私なりに理解しているのと同じように、みんなも、みんなのそれぞれの認識の中で理解しているだけであり、すべての事柄についてそういう具合だから、ある程度までは共通認識を持てるが、完全一致の認識を持つことはできない」とした。

(カ) 心象や時間それ自身の性質として／第四次延長のなかで主張されます

宮沢賢治の「第四次延長」とはどのようなものなのか、現在

の物理学で云う「四次元時空」とは多少異なるものを指しているのではないかと思われる。通常の物理学で「時間」は四次元時空の要素として扱われるにしても、「心象」は四次元時空を書いた時期は、アインシュタインが、それ以前に特殊相対性論(一九〇五年)と一般相対性理論(一九一六年)を発表して、ノーベル物理学賞(一九二二年)を受賞した直後の時期であった。宮沢賢治は、その後の四次元研究の広がりには大きな期待を寄せていたと考えられる。よって、宮沢賢治の「四次元」とは、現在の物理学で云う「四次元」をもっと広く解釈して、過去から未来まで、すべてのものには因果関係が働き、その連続で世界が成り立っている、この世界そのものの研究と解釈すべきではないか、と考える。

前節の現代語解釈では、「心象や時間それ自身が内包している問題であり、時間や空間それに心象も含めた、この世界を全体として扱う四次元の問題として、今後の四次元研究の成果として解明され主張されて行く、そういう問題である。(その解明が成って、私の主張したい事が、初めて正しく他の人々に伝わるだろう)」とした。

四 終わりに

今回、宮沢賢治の『序』という詩について、大乘仏教の求道者としての生き方を重視した、一つの詩全体を通した現代語解

釈を試みた。全体的な要約としては、前回の「無宗教的な立場からの現代語解釈」と比べて、『序』の冒頭に記された「わたしといふ現象」について、仏教で云う輪廻の考え方に基づいた解釈を採用し、また末尾に、「今後の四次元研究の成果として説明され主張されて行くだろう」に続けて、「その説明が成って、私の主張したい事が、初めて正しく他の人々に伝わるだろう」と付け加えた以外に大きな変更は行わなかった。末尾に追加した解釈は、大乘仏教的生き方とは関係しないが、詩全体として宮沢賢治の主張したい内容として、追加したものである。但し、前節の「三 用語や文節の詳細解説」に取り上げた箇所は、現代語解釈するのに大変困難を極めた部分である。このことについては、今後とも他の研究者の研究成果も参考にしながら、再検討が必要かどうかを考えていきたい。

(二) 森佐一氏宛の手紙に付いて

次に、『序』の現代語解釈に関連した事項について述べる。この『序』の解釈について資料となるのが、詩集発行の翌年(大正十四年)、森佐一氏から詩誌「貌」への寄稿依頼を受けて同氏との交流が始まるきっかけとなった、同氏宛の手紙である。その手紙の中で、宮沢賢治自身が『序』について述べた、「私はあの無謀な『春と修羅』に於て、序文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨としたさまざまな生活を発表して、誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考えたのです。」という部分である。

この「歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し」とはどのような事か、沢山の研究者がさまざまな解釈を行っている。筆者は、次のように考えたい。

『序』で取り上げているさまざまな事物を見ても明らかなように、宮沢賢治は「人間」と「人間以外」を区別せず同列で扱っている。また、生物学で云う「生物」と「無生物」も同列扱いである。しかし、私たちが通常「歴史」や「宗教」を扱う時、その目的は「人間の為の宗教」であり「人間の為の歴史」である。宮沢賢治は、そういう人間の為の「宗教」や「歴史」でなく、動植物を含む生き物全体、さらに風や光や引いては「銀河」などの無生物も含め、且つまた「修羅」のような現世以外の世界まで含む「森羅万象」を対象とした「宗教」や「歴史」を指したのではないだろうか、と考えている。「三 用語や文節の詳細解説」の(カ)でも述べた通り、宮沢賢治が『序』を書いた時期は、アインシュタインがそれ以前に特殊相対性論と一般相対性理論を発表して、ノーベル物理学賞を受賞した直後の時期であった。宮沢賢治は、今後の四次元研究の広がり大きな期待を寄せていたと考えられる。その為、無生物も含め、且つ現世以外の世界(それは、「現世以外の次元」と呼べるかもしれない)を含めた統一的な「宗教」や「歴史」の構築が可能だと考えたのではないだろうか。それが、「歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し」た理由ではなかったのか、と考えている。

(二) 宮沢賢治の「共感覚」について

最後に、宮沢賢治作品の今後の研究において、一つの大きな手掛かりになると思われる指摘について述べる。

山下聖美著『NHKテキスト 一〇〇分de名著「宮沢賢治スベシャル」』（NHK出版、二〇一七年）で、山下氏は「共感覚」から宮沢賢治を考えるアプローチ（二二頁）に言及している。宮沢賢治の作品には、「向ふの縮れた亜鉛の雲へ」（詩「屈折率」から）や「クラムボンのかぶかぶわらったよ。」（童話「やま

なし」から）など、修飾する語句と修飾される語句との対応において、私たちの常識と全く異なる表現が沢山出てくる。それは、音楽を聴いていて色や形が見えるという、幼少期には誰もが持っていた「共感覚」を、宮沢賢治は大人になっても持ち続けていた、豊かな感性の持ち主だったからではないか、という指摘である。宮沢賢治を「共感覚」の持ち主だったとすれば、今まで「何故そういう表現になるのか」理解に苦しんできた宮沢賢治研究者や一般読者にとって、宮沢賢治独特の表現の何割かが理解できるようになるのではないかと考える。

参考文献

- (ア) 草野心平編『宮沢賢治詩集』新潮文庫 青三〇、一九六九年
- (イ) 梅原猛『地獄の思想 日本精神の一系譜』中公新書一三四、一九六七年
- (ウ) 齊藤文一『宮沢賢治の世界 銀河系を意識して』国文社、二〇〇三年
- (エ) 板谷栄城『宮沢賢治の見た心象く田園の風と光の中から』NHKブックス五九一、一九九〇年
- (オ) 原子朗、他監修『宮沢賢治の世界』展 凶録』朝日新聞社、一九九五年
- (カ) 天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』新書館、一九九六年
- (キ) 八重樫昊編『復刻版 宮沢賢治と法華経』図書刊行会、一九八七年
- (ク) 渡辺照宏『日本の仏教』岩波新書（青版）二九九、一九五八年
- (ケ) 渡辺照宏『仏教 第二版』岩波新書（青版）九一五、一九七四年
- (コ) 松尾剛次『仏教入門』岩波ジュニア新書三二二、一九九九年
- (サ) 中村圭志『教養としての宗教入門』中公新書二二九三、二〇一四年
- (シ) 佐々木閑『別冊NHK 一〇〇分de名著 集中講義 大乘仏教 こうしてブッダの教えは変容した』NHK出版、二〇一七年
- (ス) 山下聖美『NHKテキスト 一〇〇分de名著「宮沢賢治スベシャル」』NHK出版、二〇一七年